

## 船の上でみた愛国心

長瀬 睦子

昨年末から年始にかけて、ヨーロッパまで休暇旅行を試みました。

なにしろ期間はたった28日間、しかも懐ぐあいもあって往復ともシベリヤ経由でしたから、その慌しかったこと。皆様にもお察しいただけるとと思います。けれど、最後の行程が、ナホトカー横浜間のソ連船バイカル号での船旅でしたので、メモ類を整理したり、映画をみたり、ゆっくり寛ぐことが出来ました。そしてこの時になって、おそまきながら、やっと旅情らしきものも味わいました。

この船上での2日目の夜、ラウンジでパーティーがあり、乗組員によるロシアの民族舞踊や、ジャズの演奏など、数々のattractionが私達を楽しませてくれました。なかでも、私の心を強く打ったのは、乗組員20人前後による、ロシア民謡の混声合唱でした。胸をはり、頬を紅潮させ、誇らかに歌う祖国の歌は、彼等の素朴な愛国心を聴く者の心に伝え、強い感動をあたえずにはおかないものでした。巧みだというのとはちょっと違います。でも歌の心があふれ、それが私達に伝わってくるのです。

私はいつも思うのですが、一流の合唱団がステージで歌う宗教音楽よりも、小さな聖堂で聞く、技術的には劣る聖歌の方が心を打つのはなぜでしょう。歌は、歌う人と聴く人との合作であるのかも知れません。とすれば、いろんな国籍の、いろんな顔をした、そして、いろんな思いをいだいた人々の集まった、船上でのパーティーは、うってつけの舞台であったのでしょうか。

隣席のポーランド人の老神父は、そっと目頭をおさえていました。愛する祖国を捨て、異国に骨を埋める覚悟のキリストの兵士も、ふっと故郷を思い出したのかも知れません。この人は、モスクワからこっち、事ある毎にソ連の悪口ばかり言っていた人です。

祖国を愛する気持は、歌っている人達も、聴く私達も同じであり、庶民の願う幸せは、話す言葉の違いこそあれ、変りはないのだと私は強く感じました。それなのに、なぜある国民は一つの面をみて、また或る国民は他の面をのみ見て、そのみを正しいものと信じ、他を悪として、争わねばならないのでしょうか。

共産圏の国々の出入国はまだまだ厳重です。往きの船上では、独ソ間の戦争の映画をみせられま

した。自国の人間が殺される時は、その非道に憤るのに、敵の兵隊が死んで行くのを見て喜ぶ心理というのは恐ろしいことです。私達日本人だって、ひとたび戦争の渦中にまきこまれたら、正常な判断力を維持出来るとは保障出来ません。太平洋戦争の時でしたが、アメリカ兵の捕虜をみて、「おかわいそうに」と言った日本婦人が、一般の非難をあびた事件もありました。

旅先で知りあった、或る日本女性から聞いた話ですが、その親しいドイツ人は、ドイツと日本とは、今度何時、また組んで戦争したらよいだろうか、などとその人に向かって言うそうです。それは冗談だと思いたいのですが、それにしても、まだまだ国と国との間に横たわる壁は厚く、根強いゆきがありと、こだわり、或いは反感といったようなものがあると思われまます。

ヨーロッパを旅行中、日本で見なれぬせいか、兵隊さんが多いのが目につきました。クリスマス休暇の頃でしたので、駅には帰省、帰隊の兵隊さん達であふれていました。頬のバラ色の、母親との別れが大部つらかったのではあるまいかと思える、まだぼんの少年の兵隊達をみて、この若者達が、戦場で命を散らすような事態に決してなりませんようにと祈らずには居られませんでした。流れる歌声に耳をかたむけ、旅で出あったいろんな国の人々をおもいつつ、旅の最後の夜をすごしたのでした。

(一回生)

## 高校における地理授業プラン考

### — 単元「世界の農牧業」を例として —

伊 部 久 子

#### I 単元の構成

文部省の指導要領、教科書と規制された中で、教師自身の独創性を活かして、どう授業をすすめるか —。毎年、あれこれ授業プランをたてる事は、頭の痛い事である半面、楽しみである。高校で地理を担当して、今年が5年目をむかえる。教科書中心に授業をすすめていったのが、第一年目。生徒自身の発表学習に主体をおいたのが2年目。3年目は、岩波新書「世界経済図説」の解説に終始した。昨年は高校地理教育談話会(高校の地理教師によって作られた自主的サークル)で作った地理資料を中心においた。

ところで、高校では地理学習は1年でおこなわれる。2年で、倫理社会、世界史前半、3年で、世界史後半、日本史、政治経済と……教科「社会科」は分割されて授業がすすめられる。この分担については、知識を系統的に理解させる為の配慮がなされている訳ではない。むしろ、各教科の勢力的な対置関係がもち込まれたものと聞いている。従って、地理学習では、資本主義発達の歴史の